



## 玉手 英利

一般社団法人東北経済連合会 参与

## 新たな大学教育のはじまり

「大学での学び」はコロナ禍で大きく変わりました。大規模クラスでの対面授業や学外実習などをこれまで通りに行うことは困難となり、どの大学も教育を続けるために苦闘しています。年々、大学への社会的要請が高まりを見せる中で、このコロナ禍を迎え、大学教育はより一層大きな転換点に差し掛かっています。これからの大学教育を考えるうえで、「何を学ぶのか」、「どのように学ぶのか」、「誰が学ぶのか」の3つは重要な論点です。

「何を学ぶのか」については、Society5.0と第4次産業革命、高齢化、グローバル化などの社会変化の中で普遍性を失わないスキルやリテラシーを、専門分野に関わらず身につける教育が必要です。データサイエンスはその1例で、山形大学では2017年度に理学部にデータサイエンスコースを設置したのを嚆矢として、2019年度にはデータサイエンス教育研究推進センターを設置し、他大学と連携してデータサイエンス教育を推進しています。さらに、人材育成の基層において、到達目標とする持続可能な幸福社会(sustainable well-being society)を意識づけるために、教育を始めとする山形大学の全ての活動をSDGsに結びつけ、“empower!”(力づける、力を与える)するYU empowering with SDGsを始めました。

「どのように学ぶのか」については、コロナ禍によりオンライン授業が積極的に導入されたことで、時間や場所に縛られない新たな学び方の可能性が広がりました。その反面、課外活動や地域でのフィールドワークなど、他者と直接に協働する機会が減り、帰属意識や連帯感が薄れているように感じられます。現実空間での直接のふれあいが、青年時代の社会的人格形成に大きな影響を及ぼすことを考慮すると、これからの大学教育では、対面とオンラインの最適配分を見定める必要があります。

「誰が学ぶのか」については、Society5.0に代表される産業構造の変化やグローバル化によって、働く世代のスキルアップがますます求められており、長寿社会で人生を豊かに過ごすための生涯教育への関心も高まっています。そのため、山形大学では、社会人のキャリアアップをはじめ各世代が求める多様な学びを、オーダーメイドの教育プログラムとして企画・提供する山形大学エクステンションサービス推進本部を設置し、事業を開始しました。

また、教育に限らず、山形大学では社会的要請に応えるために長期的計画に基づく各種事業を行っています。東北経済連合会をはじめ関係自治体・企業・個人の方々からご支援をいただき、2004年より計画・整備を進めてきた山形大学医学部東日本重粒子センターは、今年2月より水平照射室において前立腺がんに対する治療が開始されており、8月からは世界で3施設目、国内では2施設目となる回転ガントリー照射室において、様々ながんに対する治療が予定されています。これにより東北地方のがん患者の方々に新たな希望をもたらすものと期待しております。本稿をお借りしてご支援くださいました皆様に改めて御礼を申し上げるとともに、これからもお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

(山形大学 学長・たまたま ひでとし)